

目次

- 2・……研究会1. 佐山暁子（東邦大学医学メディアセンター）
大学医学図書館における蔵書構築方針
- 3・……研究会2. 大崎泉（東京慈恵会医科大学学術情報センター）
東京慈恵会医科大学学術情報センターにおける洋図書購入選定の取り組み
- 4・……研究会3. 中村雅子（大阪府立母子保健総合医療センター図書館）
病院施設職員のための卒後研修企画に沿った蔵書構築
～看護分野についての試案～
- 5・……研究会4. 川村殉子（奈良県立医科大学附属図書館）
奈良県立医科大学附属図書館における闘病記文庫の設置
- 6・……研究会5. 江上裕菜（東京医科大学図書館）
東京医科大学病院「患者さま図書室」について
- 7・……研究会6. 藤村三枝（滋賀医科大学附属図書館）
どうすれば伝わるのかー効果的な広報とは？
「日経 BP 記事検索サービス 大学版」での実践を通して
- 8・……研究会7. 作野誠・富田一文・吉田尚恵（愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター）
愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターにおけるパスファインダー作成の
事例ー委託スタッフと専任職員との連携による効果的なサービスの提供を求め
てー
- 9・……研究会8. 辰野直子（滋賀医科大学附属図書館）
教養教育における文献検索講習会の試み
- 10・……研究会9. 井手貴広（関西医科大学附属図書館）
関西医科大学における業績DB構築について
- 11・……研究会10. 石坂憲司（信州大学附属図書館医学部図書館）
信州大学附属図書館医学部図書館の地域関連病院への新サービスの取り組み
- 12・……研究会11. 榊原佐知子（愛知医科大学医学情報センター）
2つの調査からみる医学図書館の一般公開と患者図書サービスの留意点
- 13・継続教育1-1. 講師：石井保志氏（NPO法人からだところの発見塾）
演題：患者主体の医療を支援する「Narrative Based Medicine 資料」の特徴
ー医学図書館における NBM 資料提供の意義と位置づけー
- 14・継続教育1-2. 講師：和田恵美子氏（大阪府立大学看護学部講師）
演題：患者の語りが生み出すものー闘病記とDIPEXの持つ力ー
- 15・継続教育2-1. 講師：岩崎泰人氏（元丸善(株) e-リソースセンターセンター長）
演題：電子ジャーナルの利用と課題（アーカイビング）
- 16・継続教育2-2. 講師：倉田敬子氏（慶應義塾大学文学部教授）
演題：学術情報流通における電子アーカイビングの意味

研究会 1

大学医学図書館における蔵書構築方針

東邦大学医学メディアセンター 佐山暁子

【蔵書構築方針とは】

図書館における蔵書構築（蔵書構成, collection development）とは、資料選択、収集、ウィーディング、蔵書評価、資料保存など一連の過程の包括的概念である。一連のプロセスは、図書館員と利用者コミュニティの間の相互作用により進行する¹⁾。これらの基盤となるのが蔵書構築方針であり、各館で成文化した方針をもつことが望ましいとされる。

東邦大学医学メディアセンター（以下、当センター）では、蔵書構築のプロセスごとに規定や基準を成文化し、それに基づいて蔵書管理業務を行っている。そのうち、センターで策定しているものは「選書・受入基準－図書・AV 資料の部」、「図書リタイア業務に関する規定（内規）」の 2 つであり、今回は「選書・受入基準－図書・AV 資料の部」（1993 年策定、2000 年改訂）を対象に改訂を検討する。

【目的】

当センター現行の「選書・受入基準」改訂から 8 年が経過し、現状とそぐわない部分が出てきた。さらに、電子出版の充実など近年の動向もふまえて新たに改訂を行う。そして、改訂の過程をもとに、今後の蔵書構築方針の改訂手順の確立を目指す。

【方法】

まず既存の文献、MLA²⁾⁴⁾、ALA³⁾、NLM⁵⁾などの蔵書構築方針を参考に、蔵書構築方針の要素を洗い出す。それに現方針である「選書・受入基準」を当てはめ、改訂・加筆が必要となる項目について検討を行う。

【選択・受入基準の改訂点】

資料の主題、形式、形態による基準について、現状と今後の展望にみあうように、それぞれ見直しを図る。それから、基準の前提となる[サービス対象機関・利用者の定義]、[蔵書構築の担当組織]、[基準策定から改訂の経緯]や、[当センターの蔵書変遷]などについても明文化を検討する。その際、メディアセンターは東邦大学の一組織であることを意識し、その役割を念頭において考えていきたい。さらに、必要な時に更新を図れるように、改訂に関する手順・手続きについても盛り込みたい。

【今後の課題・方向】

今後は、選書・受入基準の公開も視野に入れて、他館・他施設との関係や、利用者のニーズをいかにくみ取るかなどを含めて調整を考えていきたい。

-
- 1) 図書館情報学ハンドブック編集委員会編. 図書館情報学ハンドブック. 第 2 版, 丸善, 1999.
 - 2) Darling, Louise, editor. Technical Services in Health Science Libraries. MLA, 1983, (Handbook of Medical Library Practice, 4th ed. Vol.2).
 - 3) ALA, Guide for Written Collection Policy Statements. ALA, 1989, (Collection management and development guides, no.3).
 - 4) Richards, Daniel T.; Eakin, Dottie. Collection Development and Assessment in Health Sciences Libraries. MLA, 1997, (Current Practice in Health Sciences Librarianship, vol.4).
 - 5) NLM, Collection Development Manual of the National Library of Medicine. 4th ed., NLM, 2004.

研究会 2

東京慈恵会医科大学学術情報センターにおける洋図書購入選定の取り組み

東京慈恵会医科大学学術情報センター 大崎 泉

はじめに

東京慈恵会医科大学学術情報センター（以下、当センター）では限られた予算内で本学の利用者に必要な資料を提供するために、各専門分野の教員や図書館委員の意見を参考に、最低限購入しておくべき図書（基本洋図書）の選定とそれ以外に必要な洋図書選定を蔵書構築全体の取り組みとして行っている。

洋図書選定の流れ

当センターでは次の手順で洋図書選定を行っている。

- 1) 図書館より、洋図書推薦のための新刊情報や書評を、図書館委員や各講座の図書係に電子メールにて配信する。
- 2) 推薦図書は図書館宛に電子メールで返信してもらう。
- 3) 学内向けのホームページの洋図書購入希望リストに推薦図書を追加する。
基本図書の改訂版が発行された場合は、自動的にリストに追加し購入する。
- 4) 選定月には選定会議に向けて、次のことを行う。
 - ・推薦図書が選定基準に沿っているか図書館職員がチェックする。
 - ・洋図書購入希望リストを会議の2週間前に図書館委員に配布し、3段階で評価してもらう。
 - ・評価のついた洋図書購入希望リストを会議1週間に図書館委員に配布する。
 - ・推薦図書のうち、見計らいが可能なものは会議当日までに用意する。
- 5) 選定会議にて推薦図書の購入を検討する。
- 6) 購入が決定した図書は書店に発注し、リストを学内向けホームページにて公開する。

まとめ

洋図書選定はかつて毎月実施していたが、1年に2～3回程度に減らすことにより、同一分野の出版予定図書も含めて比較検討が容易になり、また、全分野間のバランスに配慮した選定をより効果的に行えるようになった。リスト作成や資料の印刷・配付といった事務的な手間も削減した。

今後は、雑誌との購入のバランスを見直しつつ、これから増えていく電子ブックの購入を考慮した選定基準を検討していきたい。

研究会 3

病院施設職員のための卒後研修企画に沿った蔵書構築～看護分野についての試案～

大阪府立母子保健総合医療センター図書館 中村雅子

<選書作業の現状>

病院施設には、さまざまな医療専門職種の職員が所属しており、それらの職員ひとりひとりの情報要求に沿った図書館サービスを提供することが、病院図書館機能の使命のひとつと考える。職員からの要望に沿った情報を満たそうとすれば、それに対応した蔵書構築が必要となる。当館、図書委員会内において年に一度、実施される「書籍購入希望調査」がその手掛かりとなるのだが、この調査自体は、既存の蔵書構成を考慮した「選書作業」ではなく、各部署の選書担当者の裁量に任される。構成人員が少なければ、部署内全員の承認を得た結果として捉えることができ、その結果は、診療内容に即応したものと考えることができる。ところが、職員 500 名以上にもなる看護部の「書籍購入希望調査」については、看護管理部内に一任される為、蔵書構成に偏りが生じ、日常業務におけるレファレンスやリクエストに対応できていない。

<卒後研修プログラムと図書館利用>

看護師が図書館に寄せる問い合わせの多くは、当施設看護部主催の「卒後研修プログラム」に沿ったものである。例えば、「リーダーシップやチームワークに関する書籍はどこにあるのか。」「レポート提出があるが、指定書籍のうちで今読めるものが図書館にあるかどうか。」などである。「所蔵の有無」といった問い合わせは、新規採用時に図書館からのガイダンスで伝えているわけだが、就職後数年たっても図書館を上手に活用できていないと言えない。

<看護部研修企画に沿った蔵書構築>

2007 年 4 月より、25 年勤続の司書が図書委員会に正規委員として参画することとなった。今年 2 年目となる新制図書委員会は、いまだに軌道に乗っているとは言い難い。司書からの試案を図書委員会で諮り、看護管理部に提案し、蔵書を再構築していこうとの目論見である。その根拠およびその素材として、現在実施中の院内外の研修企画内容および、日本看護協会の「資格認定制度」を取りあげることにする。この分野の先行研究の精査については未着手である為、この試みが的外れに終わる不安がある。しかし、今般の調査過程において既存蔵書の確認作業を実施することになるので、今後の図書館運営にも役立つものと判断、作業に着手することにした。当館看護分野の書籍は、様々な経緯により「大阪府立助産婦学院蔵書」の看護分類、NDC8 版、NLMC などの各種分類法によるものが混在している為、NLMC への統合を実施。その作業の傍ら資料の鮮度・質を考慮し評価していくこととする。小項目ごとの資料不足については、具体的な資料名を探索し、選書作業に転換していきたいと考えている。

<参考：阪府母の変遷>

1980 年 4 月、助産師養成施設開学（1997 年 3 月、閉学）

1981 年 11 月、産科・新生児科の専門病院として開院。1982 年 4 月、非常勤司書 1 名

1992 年、研究所、小児病棟開設。診療科目が増えたことに伴い非常勤司書 2 名となる。

2008 年、患者図書サービス充実のため、非常勤司書 3 名となる。

研究会 4

奈良県立医科大学附属図書館における闘病記文庫の設置

奈良県立医科大学附属図書館 川村殉子

I. 経緯

奈良県立医科大学附属図書館（以下、当館）では、2008 年 3 月 10 日に闘病記文庫を開設した。設置のきっかけは、2007 年 10 月に医学部医学科 3 年生（当時）から要望があったことである。

要望内容は「医師をめざす学生も患者の気持ちを知ることの重要性が増してきた。患者の気持ちを綴った闘病記は身近な教材であるが、個人で収集できる冊数は限られているので、図書館で体系的に収集し、誰でも利用できるようにしてほしい」というものであった。

当館としても闘病記に注目していたところであり、図書委員会の承認を得て闘病記文庫を設置することとなった。

II. 目的

患者が抱える不安や悩みなどの心理を理解する一助として、闘病記文庫を設置し利用者に提供する。利用対象者は学内構成員である学生、教職員。なお学外来館者には資料の閲覧と複写サービスの提供をおこなう。

III. 準備

既出学生の紹介により健康情報棚プロジェクト（以下、棚プロジェクト）の存在を知り、協力を得た。棚プロジェクトとは、闘病記を含む医療資源を求める利用者が手に取りやすい仕組みを社会提言している民間研究グループである。

棚プロジェクトでは公共図書館で闘病記を市民にわかりやすく提供するためのガイドラインを作成しており、おおむねこのガイドラインに沿って準備を進めた。

資料の収集においては、学生用図書購入予算の一部を充てて新規購入した図書、既所蔵図書および棚プロジェクトからの寄贈図書による開設となった。

IV. 利用状況

闘病記文庫設置以前は、闘病記と思われる資料の借出しが看護学科生や看護師を中心に利用されていたが、開設から約 3 ヶ月経った現在は医学科生の借出し利用も増えた。

過去 4 年間の年間借出し冊数と、開設以降の月間借出し冊数はほぼ同じである。

V. 今後の課題

闘病記文庫の利用者はリピーターが多く、学内に周知を続けていけばこれからも利用されていく資料群だという実感を得られた。

また当館闘病記文庫がテレビ等で紹介され、闘病記を閲覧するための学外来館者が増えた。しかし現在は学外者個人に対しての借出しサービスはおこなっておらず、当館の地域貢献という観点からも検討していくべき課題である。

研究会 5

東京医科大学病院「患者さま図書室」について 東京医科大学図書館 江上 裕菜

1. 「患者さま図書室」の概要

2006 年 6 月、患者さんや家族の方々に病気や体について医学的に信頼できる情報を提供し、精神的な援助の場となる事を目的として、「患者さま図書室」が設置された。病院長直属の組織で、大学図書館も協力している。約 15 m²の狭いスペースだが、外来からアクセスしやすい場所にある。開館時間は月曜～金曜の 9 時半～16 時半で、大学図書館とは別の専任スタッフ 3 名が、ローテーションで午前・午後各 1 名ずつ勤務している。設備としては、書架 3 連とパンフレット用のラック 1 台の他、利用者用とスタッフ用のパソコンが 1 台ずつ、プリンター 1 台、コピー機 1 台、閲覧用机 2 台などがある。蔵書はすべて医学関係のもので、貸出しは行っていないが、持ち帰り自由のパンフレットを用意してある。蔵書数は 736 冊（2008 年 8 月 13 日現在）で、資料の収集・整理は大学図書館が担当している。

2. 利用者の動向

開設当初は 300～400 人/月の利用があったが、開設 6 カ月目以降は 200 人前後/月で安定している。利用者の大半は当院の患者さん（外来および入院）であるが、患者さんの家族の利用も多い。利用者の統計は、午前・昼休み・午後の 3 つに区切ってカウントしている。昼休みを除いて、午前・午後とも利用は多い。利用形態としては閲覧が最も多く、次いでインターネットの利用、所蔵資料のコピーとなる。

3. 参考業務について

1 日に何件もの質問がある事は少ないが、利用者から依頼があった場合には、所蔵資料やインターネット上から情報を探し、提供している。当室では「参考業務連絡票」を作成しており、大学図書館へも報告がある。この連絡票には、どのような質問があり、どのようなツールを使って回答したかが記録されている。質問内容は、本人や家族の病気について知りたいというアバウトなものから、具体的な薬や治療法、検査値について、あるいはセカンドオピニオンについて知りたいなど、実に様々である。当室のスタッフは医学についての専門的な知識があるわけではなく、また、必ずしも図書館等での勤務経験があるわけではない。しかし、病院のスタッフとして医療情報を提供することになるので、可能な限り新しくて正確な情報を見つけだす事が求められる。

4. 今後の課題

図書室のスペースを考えると、今後蔵書が大幅に増える可能性は低い。限られた資料の中で利用者からの質問に回答する為には、過去の参考業務内容を分析し、医学図書館員として「患者さま図書室」のスタッフに対するアドバイスや協力が必要と思われる。また、利用者のニーズを捉え、今後の選書に反映させたい。その為には、今回の研究だけで終わることなく、定期的に「参考業務連絡票」の内容をまとめて検討していく事が望ましい。

研究会 6

どうすれば伝わるのかー効果的な広報とは？
「日経 BP 記事検索サービス 大学版」での実践を通して
滋賀医科大学附属図書館 藤村 三枝

1. はじめに

滋賀医科大学では、現在約 4,000 タイトルの電子ジャーナルを契約し、リンクリゾルバ（「くるくるリンカー」という名称で提供）を導入し、学外からのリモートアクセス環境を整備し、提供している。これらの資源やサービスが有効に使われるためには、利用者への広報が不可欠であり、非常に重要なものとなる。当館においては、メールやホームページを使った広報と紙媒体での広報とを行っているが、カウンターや電話での対応を聞く限り、存在すら伝わっていないことが多いようである。

今回は、2008 年 1 月に導入した「日経 BP 記事検索サービス 大学版」に焦点を絞り、実践した一連の広報活動を報告し、利用者に伝えるにはどうすればよいのか、効果的な広報とはどのようなものかを考えたい。

2. 導入の経緯と導入後の利用状況

2007 年 7 月日経 BP 社よりトライアルの案内があり、10 月から 2 ヶ月間無料トライアルを実施した。財源がないため導入の見込みは薄かったが、利用件数の多さ、フィードバックで高評価が得られるなど利用者からの反応が良かったことに加え、教員からの後押しもあり、翌 1 月から正式導入となった。

トライアル中は 1,390 件の利用があったが、導入後は 1 ヶ月あたり 300 件前後を推移する状況が続いている。

3. 広報の実践

<トライアル時・正式導入時>

- ・全学メール配信
- ・図書館ホームページ（NEWS、トライアル専用ページ、フィードバック設置）
- ・館内ポスター掲示
- ・パンフレット、チラシ設置・カウンターでの直接配布

<利用促進キャンペーン>

- ・館内ポスター掲示（展示台・ブラウジングコーナー）
- ・館内ならびに学生食堂の机上に三角柱お知らせ設置

4. 対策

キャンペーン後もあまり効果がみられないことから、問題点を探るため、利用者に直接インタビューを実施する。

使われないのはなぜなのかー知らないから（伝達の方法の問題）なのか、知っているが興味を惹かれないから（広報の内容の問題）なのかーを知り、対象となる利用者を知ることによって、相手に合わせた効果的な広報を行うことが出来るのではないかと考える。

研究会 7

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターにおけるパスファインダー作成の事例

—委託スタッフと専任職員との連携による効果的なサービスの提供を求めて—

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター 作野 誠・富田一文・吉田尚恵

発表の動機

当センターでは、平成 17 年度から業務委託を断行した。当初はこの業務委託はうまくいった。成功したと思っていた。その成果を成功事例として、発表してきた。しかし、委託 4 年目を迎えて、業務委託導入の成果と平成 21 年度以降の当センターの中期計画を専任職員の役割を中心に検討している。そこで、委託スタッフと専任職員との連携・協働システムを見直す検討をしている。そのようななかで、委託スタッフと専任職員との連携によるパスファインダー作成の事例を振り返り、効果的なサービスが提供できる方途を探ることにしたい。

当センターにおけるパスファインダー作成の取組み

当センターでは、歯学部分館であった平成 15 年当時から、歯学部 3 年生からの歯科医学史に関する質問に応えるために、パスファインダーの作成に取り組んだ。¹⁾ しかし、担当していた専任職員が平成 18 年 4 月から日進のメインキャンパスにある図書館情報センター（本館）に転属になり、パスファインダーの更新が等閑になっていた。

そのような状況のなかで、南山大学・中部大学と本学で形成している「CAN 私立大学コンソーシアム」において、平成 19 年度の事業としてパスファインダーの作成が持ち上がった。当センターが以下の 3 つのテーマについてのパスファインダーの作成を担当することになった。

①年金について調べよう ②睡眠時無呼吸症候群について調べよう ③QOLについて調べよう

委託スタッフと専任職員との連携によるパスファインダーの作成

当センターでは、業務委託に当り業務を情報提供業務（パブリックサービス）と情報管理業務（テクニカルサービス）及びそのマネジメントに分けた。利用者支援・利用者教育は専任職員の業務とし、「レファレンスサービス」を充実することを外部委託の前提にしていた。しかし、閲覧業務の殆んどを委託スタッフに委ねているため、パスファインダーの作成にあたっては、委託スタッフと専任職員との連携が必要になった。すべての面で十分な連携ができとはいえないが、担当分のパスファインダーを作成することができた。その他にも、医学情報、アレルギー、花粉症、食品添加物、介護、地球温暖化、うつ病等についてもパスファインダーの作成を試みている。

1) その経緯については『図書館雑誌』Vol. 98、No. 4、pp. 228-229、日本図書館協会、平成 16 年 4 月で紹介し、現在もセンターHP で公開している。以下参照。

<http://www.slib.aichi-gakuin.ac.jp/path/path.html>

研究会 8

教養教育における文献検索講習会の試み 滋賀医科大学附属図書館 辰野 直子

1. はじめに

滋賀医科大学では、教養教育において情報リテラシー教育を充実させることを今年度の年度計画に定めた。附属図書館（以下、当館）では、その実現のため、学部1回生に対し講義時間を利用して文献検索講習会を実施した。この当館としての新たな試みについて報告する。

2. 実施に至る経緯

年度計画実現のため、当館として何ができるかを検討した。まず、図書館のアルバイト学部学生に、図書館サービスの利用実態について質問した。また、教養教育を担当する教員に、図書館としてどのような働きかけを行うことが学部学生の情報リテラシー能力を高めることにつながるかを質問した。

それらをふまえ、また教員の協力を得られたことから、学部学生に対し講義の1コマを使って文献検索講習会を行うこととした。

3. 講義内容の検討・講義の実施

講義内容は、当館で図書を探す方法（OPAC の使い方）、近隣の公共図書館の紹介と利用方法を、講義形式で説明するものとした。また、学生の動機づけが必要という教員のアドバイスにより、提出課題を与えて実習を行うこととした。提出課題は教員が作成した。当日は、図書館職員3名で講義を担当した。

4. 課題

受講した学生にアンケートを実施した結果、講義内容・時間配分・配布資料とも概ね好評であった。しかし、講義時間には、講義に集中していない学生がまま見受けられた。

学生を飽きさせない講義内容・講義方法を見出すことが課題である。また、従来より実施してきた「オリエンテーション」や「専門教育における情報リテラシー教育」とどのように関係づけるのか、今後どのようなかたちで「教養教育における情報リテラシー教育」を行っていくか、検討が必要である。

研究会 9

関西医科大学における業績 DB 構築について

関西医科大学附属図書館 井手 貴広

【はじめに】 関西医科大学(以下、本学)では所属する研究者とその業績を全学的に管理することを目的として、2007 年より研究業績 DB の構築を開始した。これは(株)educe が開発した大学向け DB で、本学では大学情報センターが学内サーバにこれを設置しており、学内 LAN に接続している端末からであれば、Web ブラウザを使ったアクセスが可能となっている。

この研究業績プロというソフトウェアは本来、大学基準協会への帳票作成ツールで、内部に業績を登録する部分を持っていた。ただ、この業績部分は、医学部独特の複雑な業績の形に対応したものではなかったため、広範囲に細かい修正を加える必要があった。この業績部分を再構築し、全学的な業績を管理することができる業績 DB として独立させることを目指し山田館長主導の下、図書館が改良を行うこととなった。現在は教員情報を持った研究者 DB と業績情報を持った業績 DB、事実上 2 つの DB として稼働している。

【導入】 大学にとって所属する研究者の業績は利用頻度が高い情報である。例を挙げると、

- ①大学 HP への公開
 - ②文科省や厚労省をはじめとする調査、大学基準協会への提出書類
 - ③外部研究資金獲得に係る申請書類や履歴書作成
- などに利用される。また、それぞれ要求される業績情報が異なる。

これまでは、各種提出書類を作成するたび、該当する業績を講座や研究者個人ごとに収集していた。これに対し業績 DB では 1 つのデータに複数の講座情報と個人情報を付与することで、一度の入力で事足りるようになっている。また、学術雑誌掲載論文や学会発表ごとに特徴的な入力項目を配置しており、これらをキーとしての抽出も可能である。

加えて、直感的に入力できるような容易さを重視し、各種書誌 DB(PubMed, Scopus, 医中誌 Web など)から可能な限りデータを流用でき、雑誌名もフルタイトルを選択すると略誌名・ISSN が自動入力される形式に変更した。また、学術雑誌掲載論文についてのみ、特に重要な業績と位置づけ、書誌の統一を図り重複入力を防ぐ目的で、上記書誌 DB で検索の上、図書館が入力を行っている。

このように、極力複数のデータ重複を避け、入力作業が軽減されるよう考慮した。

【導入後】 実際に業績 DB が稼働したのは 2007 年 9 月ごろであった。データ入力に際し、各部門で入力担当者を出してもらい、連絡窓口とした。導入当初は問い合わせも多かったが、現状は定着してきたのかずいぶん少なくなっている。2008 年 9 月時点でのデータ数は、学術雑誌掲載論文(1995-2008)約 11,000 件、著書(2000-2008)約 1,200 件、学会発表(2000-2008)約 12,000 件である。また、2008 年 9 月現在、本学総務部が研究者 DB 部分の外部公開準備を行っている。研究成果の外部公開は、説明責任という意味で、社会からの要求に応えることにもつながる。将来的には、公開可能なフルテキストを学内サーバに置き、各業績データにその URL 情報を持たせリンクさせるといったリポジトリ的な使い方も考えられる。

研究会 10

信州大学附属図書館医学部図書館の地域関連病院への新サービスの取り組み

信州大学附属図書館医学部図書館 石坂 憲司

1. はじめに

信州大学附属図書館医学部図書館では、地域医療従事者への学術情報提供サービスの向上の為、平成20年6月より長野県内の信州大学研修医、研修生派遣病院に対し、次の新サービスを開始した。開始に至る経緯と現状、今後の展望を述べてい。

- 1) JDreamⅡのコンソーシアム契約の推進
- 2) 本学図書館に未所蔵資料の文献複写サービス

2. 開始に至る経緯

平成17年12月、医療情報活動を通じて地域医療の発展に献身することを目的に「長野県医学図書ネットワーク」が発足し、当館も入会した。この活動等により県内のILLはより活発化した。しかし、卒後臨床研修制度では、本学勤務時の図書館サービスと関連病院では差が大きく、改善を求める声があった。

平成19年8月、第14回医学図書館研究会において、高知大学によるJDreamⅡ導入事例の発表があり、当研究会に参加のJST職員より本学に提案がなされた。本学はJDreamⅡを導入する経費を負担するだけで、関連病院も安価に導入できる事もあり、積極的に推進することにした。

平成20年1月、大分大学医学部分館は、県内医師に対してのオンライン申込による文献複写サービスを本実施した。他の所蔵大学からも文献を入手して希望する医師に渡すもので、当時大きな反響があった。本学は、料金後納制度による病院図書室へのILLの実績があるので、それほど問題なく文献複写サービスを開始できるのではないかと見通しを立てた。

3. 現状と今後の展望

本学、JST、契約業者からさまざまな広報活動を行い、その結果多くの関連病院がJDreamⅡに参加し、非常に利用されている。また同時期に、JDreamⅡ参加病院を対象に文献複写サービスも開始した。文献複写サービスは、Web方式による申込み、複写物の引渡しは郵送、支払いは四半期毎の後払い方式としている。

今後は、参加病院の拡大に向けて、広報活動を強化したい。また、参加病院が拡大した際に増加される文献複写サービスの対策を模索している。

研究会 11

2 つの調査からみる医学図書館の一般公開と患者図書サービスの留意点

愛知医科大学医学情報センター（図書館） 榊原佐知子、市川美智子、浅井伸夫

愛知医科大学看護学部 脇本寛子

背景

愛知医科大学医学情報センター（図書館）（以下「当館」）では、平成 19 年度から地域住民と入院患者を対象に地域公開を実施している。また現在は、平成 20 年度中に愛知医科大学病院で患者図書サービスを開始するための準備を進めている。加えて、平成 24 年 1 月開院予定の新病院には患者図書室の設置が計画されている。

地域住民・患者へのサービスを拡大する一方、アンケート結果やカウンター業務を通して、よりニーズを満たす資料提供や、利用条件見直し等の必要性を感じている。そこで、いくつかの課題の中から以下 2 点に焦点を当てて調査を行う。

1. 地域住民の医療情報需要調査

目的：サービスの受け手となる地域住民が、現在の情報提供の方法や図書館（当館、公共図書館）の蔵書についてどう感じているのか、また、どのような情報を求めているのかを把握し、運用の参考とする。

対象：①愛知医科大学公開講座受講者 約 350 名

②日進市立図書館講演会「メタボリックシンドロームと糖尿病」受講者 約 100 名

③瀬戸市立図書館講演会「お医者さんに聞く上手な受診のコツと健康情報～眼科を例にとつて～」受講者 約 50 名

方法：参加者全員に配布し、回答箱を用いて回収。無記名。

内容：「一般市民の医学・医療情報需要調査」（河合富士美, 他. 医学図書館 2002;49(4):376-382.）のアンケート項目に当館独自の 4 項目を追加した。

結果：当日の発表の際に報告し、考察を加える。

2. 図書汚染調査

目的：図書汚染度の概況を把握する。結果から感染管理必要度を検証し、対策（感染管理）を講じる際や、患者図書サービス運用方針の決定、ならびに業務マニュアル作成における根拠の一つとして利用する。

対象：図書の表紙と、盲目的に開いたページ。35 冊 70 ヶ所。

新品、公共図書館の蔵書（一般書・児童書）、当館の蔵書、病院待合室の図書。

方法：滅菌水で湿らせた綿棒細菌を採取し、35℃環境下の寒天培地で培養を行う。

黄色ブドウ球菌（マンニット寒天培地）、MRSA（MRSA 寒天培地）、腸球菌など（マッコークイン寒天培地）

結果：当日の発表の際に報告し、考察を加える。

継続教育 1-1

患者主体の医療を支援する「Narrative Based Medicine 資料」の特徴

ー医学図書館における NBM 資料提供の意義と位置づけー

NPO 法人からだところの発見塾 石井保志

I. EBM と車の両輪をなす NBM

患者主体の医療が叫ばれる中、医学教育においてもコミュニケーション能力が重視され、従来の知識偏重教育が徐々に変化している。その例として診療現場で NBM が重視され始めている。NBM とは、患者自身の背景（人生）や価値観など、患者の語り（ナラティブ）に基づく医療（Narrative Based Medicine、以下 NBM）のことである。科学的根拠に基づく医療（Evidence-based Medicine、以下 EBM）がより推進されると同時に、昨今は、単に EBM を実践するのではなく、患者の NBM をもとに EBM を適用する考え方が台頭してきている。現在、医学図書館における NBM の観点から収集資料や必要性が議論されることは少ない。NBM 資料が遠くない時期に利用者から確実に資料提供のニーズがやってくると仮定し、今後の医学図書館における NBM 資料提供の是非を考えたい。なお、混同しやすいが、NBM 資料提供は「患者・家族への健康・医療情報の提供」とは違うものである。

II. NBM 資料とは何か

まず、NBM に関係する対象資料を知ることから始め、医学図書館でなぜ扱うことが少なかったか、なぜ利用者から要求が少なかったか見渡してみる。筆者の個人的定義として NBM 資料を「患者・家族らの病気や障害とともに生活し、向き合ってきた視点が記述されている資料」とし、具体的に患者会発行資料、闘病記、介護記、絵本などを挙げたい。

第二の定義として、「患者・家族らが闘病生活を送る上で必要としてきた資料」も NBM 資料の範疇と考えている。具体例として筆者らが日本二分脊椎症協会と共同開発した「二分脊椎症ライフマップ」をもとに説明する。

III. NBM 資料提供のための課題解決

利用者のニーズがあっても、NBM 資料の実態と流通上の問題は把握することは難しい。なぜなら灰色文献であるだけでなく、医療者や医学図書館員では「当事者視点の資料」がわからないからである。特に資料名が疾病や患者会と結びつきにくいことが、収集整理のうえで最大の障壁となる。NBM 資料は行政窓口やボランティアセンターなど様々な場所に散在し、せっかくの医療資源が泣き別れてしまっているが集積することは可能である。

参考として、既に NBM 資料を医学図書館の蔵書として収集・活用している数館の事例を紹介する。最後に筆者が考える NBM 資料の社会資源としての位置づけと活用方法を提示したい。

継続教育 1-2

患者の語りが生み出すもの—闘病記と DIPEx の持つ力—

大阪府立大学看護学部 和田恵美子

1. 社会はナラティブ・ベイスド・メディシン (NBIM : Narrative-based Medicine) に何を期待するか

ナラティブ、つまり「物語」や「語り」と訳されるこの概念は、主に 1980 年代以降、心理学や社会学、哲学・倫理学、医療・福祉など人間科学の諸領域において同時並行的に注目をあびてきた。それまでの客観的、法則定立的な知識の産出を求めてきた科学モデルへのある種限界が、要請を強めたといわれている。これは医療の世界に置き換えれば、めまぐるしく変化する高度医療の現場で、病む人の人間性を回復することが求められている露呈であり、いずれ誰もが患者になることを想定すると了解可能なものとなる。しかしその多義性からは大きな変革の可能性を感じるとともに、概念を理解することの困難さを否定できない。臨まれる医療の実現のために、理想論に終わらない NBIM の具体的方法論とは何なのか。

2. 患者・病いの体験者は社会に何を生み出すか—闘病記・DIPEx にみる患者当事者

筆者が研究を始めた頃には、病いのような個人体験は“語らずが美德”とされていた。その後、私たちの環境はインターネット不可欠の情報社会となり、患者の権利意識の高まりもあいまって、当事者たちは社会に向けて声高に、あるいはブログ上で密やかに個人体験を公表するようになった。その文字版が闘病記であり、今回紹介するディベックス (DIPEx : Database of Individual Patient Experience) はその映像版である。これは「患者中心の医療」を念頭に置けば、真の意味での患者の社会参加かもしれない。メスを握る医師に代わって患者がイニシアティブをとっていく、最も具体的な形なのかもしれない。ネット上に顔を出すリスクを背負いながら、彼らは社会に何を訴えようとするのか。加えて、病気にかかったばかりの患者には“病い体験初心者”として、これらを医療情報として必要とする者がいる。医療者の提供する情報には何が不足し、何がここにはあるのか。これは患者会や自助グループ等と何が違うのか。

3. 語られた病い体験はどこへ行くのか—語りを医学・看護教育へ生かす

人間性を尊重した医療を模索するということは、彼らに対面する医療者の姿勢を問うことと同義であるともいえるだろう。確証高い医療を施しつつ、心温かい医療者を育成するためには、彼らに何を教育すべきなのか。模擬患者・医療の現場に接する次の方法として、語りは、闘病記は、また当事者の映像は、医療者の心に訴えかける新たなツールとなりうるだろうか。ここ数年は医療を目指す学生本人たちからの、患者の語りに接したいという要望を受けることが多かった。彼ら自身もまた自らが出ていく社会において、何を求められているのか現実を理解し、その高い理想像に不安を抱いている。学ぶ本人たちが満足し、医療サービスの受け手である市民もが納得する教育とは何か。

当日は、これらの疑問を自らに問いかけながら進めていきたい。

4. 最後に—病い体験は医療情報なのか、図書館に期待すること等を展望する。

継続教育 2-1

電子ジャーナルの利用と課題（アーカイブ）

元丸善(株) e-リソースセンター 岩崎 泰人

1970 年代から始まった科学技術の高度化・専門化は、その進展に伴い海外の STM（科学・技術・医学）分野の学術出版社や学会の事業運営に大きな影響を及ぼした。

医学を始め各研究開発領域では更に細分化された課題に取り組んだ。例えば臨床医学の領域では、血液学から臨床血液学、更には小児血液学など一層高度に専門分化し進展した。

各出版機関は、これら個々の領域や課題に伴い組織の細分化を進め、編集・査読・校正・印刷までのプロセスも同様に分野毎に工程処理がなされた。

その様な過程の中、情報の速度という要素を含みつつ定期刊行物の種類は増加し、多品種多量目の事業方向に足を踏み出した。80 年代から 90 年代の初頭まで出版競争は激しくなり、それぞれの体力・方針・戦略により経営上の相違が生じ一部疲弊の影がみられた。これらの状況を経て 90 年代初頭のインターネットの出現は、出版経営層に取り、高度情報化環境による事業構造の基盤革新の機会と期待された。ACS（米国化学会）・Elsevier・IOPP（英国物理学会）などの出版機関は独自の手法で電子ジャーナルの実証実験を開始した。

電子ジャーナルのネットワークによる流通構造は、印刷・仕分け・海外発送・事故対応などの業務の仕組みを大幅に組替える可能性を持つと認識された。出版機関の経費構造の主要部分の一つである業務コストの削減とコンテンツの生成からエンドユーザー（情報の最終利用者）に届くまでの時間の大幅短縮は総じて情報の再生産のサイクルの速度を上げるものと期待された。また、この時期は出版機関の経営層も代替わりが始まった時でもあった。

これらの経緯と今後の方向性のなか、利用者の観点から見た利点と課題を整理する。パッケージ・セール花盛りの今、提示されたコンテンツを導入（利用契約）すると観点から、①新たな図書館機能と役割②図書館のミッションとしてのコンテンツの維持③コンテンツの生成過程などに触れ、今後の版元との関係も含め本来あるべき姿や本質的な事柄を再確認する時期に入りつつあると認識する。

商業出版社はもとより学会の事業運営やコンテンツの販売を行うのは種々の意味でのセールのプロフェッショナルであり、グローバルだが狭い学術出版業界を移動している。そこで共通の視点は市場分析と対応であり、国別のトップユーザーやコンソーシアムの集約代表機関を確認し活動している。London Online の Potential Customer の囲い込み現象もしかりである。80 年代から参加や出展を繰り返したが、近年は一層マーケティング戦略を明確化し、顧客の階層を特定した活動が活発になっている。一見会場の活気は素人目には従前より静かな様相に見える。しかしながら、各ブースの脇にある会議室型の貸しきり部屋や周辺のホテルの会議室や特設ルームでは、次年度に向けて策定された価格方針や価格構造並びに新機能や新商品について盛んに協議が行われている。要はプロのセールスを相手にわが国のコンソーシアムも対応を余儀なくされている。2000 年代初頭と異なりわが国も現在は電子ジャーナル（e-ジャーナル）という言葉が定着している。どこを或いは何を軸に対峙関係から本質的な関係の確認をしていくのか、今後 STM の分野に活動する方々の認識がその鍵を握ると考える。

継続教育 2-2

学術情報流通における電子アーカイビングの意味

慶應義塾大学文学部 倉田敬子

1 学術情報流通と電子化

1) 学術情報流通の特徴と大学図書館の役割

近代以降の科学活動は、科学者集団による集団的営為であり、他の研究者の研究成果を始めとする学術情報を研究者同士で交換することは、科学活動を進めるのに必須の活動である。さらに、研究費の獲得から就職まで研究者の評価は研究成果によって測られるため、研究者にとって自らの成果をできるだけ多くの人に知ってもらうことも非常に重要なものとなる。この情報入手と成果発表の両方の機能を果たしてきたのが学術雑誌であり、大学図書館は、学術雑誌を収集、提供、保存することにより学術情報流通に大きな役割を果たしてきた。

2) 電子ジャーナルによる変化

学術情報の電子化により出現した電子ジャーナルは、現在のところ既存の学術雑誌の出版体制(査読制による評価、国際商業出版社による寡占的流通など)を維持したまま、提供のみが電子的に変更されたシステムといえる。これは学術情報の入手、成果の公表両方の機能が満たされていることから研究者にとっては大きな変化ではないが、閲覧システム、データの保存が全面的に出版社に移行したことにより、大学図書館が直接電子ジャーナルの提供、保存に携わることは実質なくなったと言ってよい。

2 学術論文の電子的流通

1) 電子化と論文単位での流通

主流としての電子ジャーナルの体制とは別に、電子化によって雑誌というまとまりではなく、学術論文という単位で電子的に流通させることが技術的には容易になった。研究者が自分のサイトで論文を公開するなどのセルフアーカイビングは、学術雑誌とは異なる自由な学術情報流通ということも可能である。

2) オープンアクセスの動向

現在話題になっている学術情報流通におけるオープンアクセスの動きは、①学術雑誌側が OA にする (OA 雑誌, エンバーゴなど) と、②セルフアーカイビングに大きく二分できる。このセルフアーカイビングには、National Institute of Health の PubMed Central も各大学が構築している機関リポジトリ (IR) も含まれる。

3) セルフアーカイビングが学術情報流通に果たす意味

電子ジャーナルとして流通している論文を重複してセルフアーカイビングする意味はどこにあるのか。理念としては、より自由なアクセスを求める、現在の商業出版社主導の学術情報流通へのアンチテーゼと位置づけられが、その効果をどう考えればいいのか、大学図書館として、この動きにどう対処していくべきなのか、これらの課題を考えるにあたって重要な視点は、大学図書館が今後その役割をどう規定していこうとしているかにかかっているといえる。